chapter 2
社会福祉法人
調布白雲福祉会

元○○。保育以外の道からの職員採用が広げる園の可能性

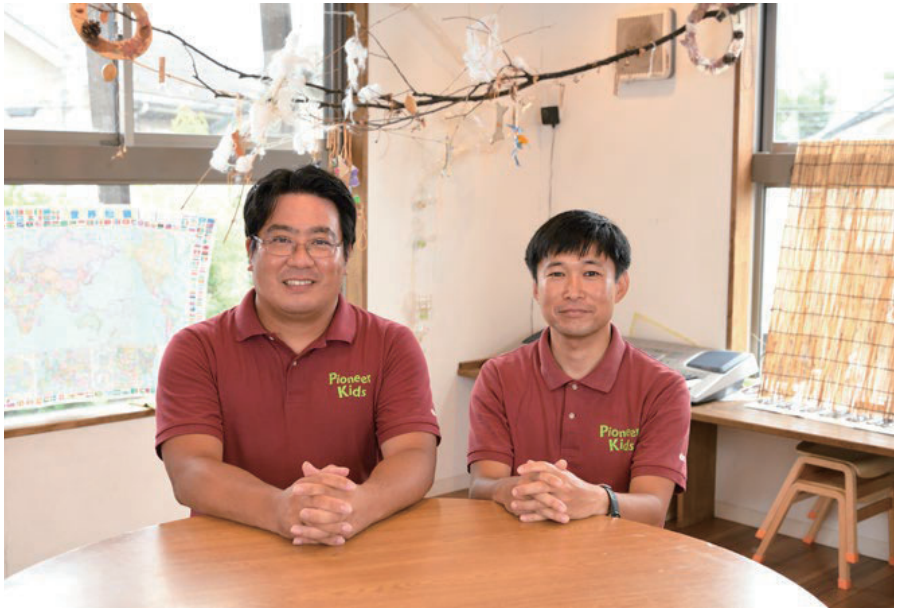
養成校で保育を学んできた職員も、異業種で経験を積んできた職員も。
一緒になって、園全体で子どもを見守る。
だからこそ実現される豊かな保育と体現される各園の個性。その真髄に迫る。

Corporate profile

社会福祉法人
調布白雲福祉会
取材園：パイオニアキッズ 菊野台園

調布市を中心に保育園・認定こども園・学童を運営。テ・ファリキという保育指針を取り入れ、「大人の声がしない」子ども主体の保育を実践。

住所：東京都調布市仙川町 2-13-1-101
法人設立年月：2014年1月
ホームページ：https://www.shiragumo.com/category/information



インタビューを受けた人

理事長
宮武慎一
● Miyatake Shinichi

「人が変わる瞬間に立ち会いたい」と一念発起し、大手企業での生命保険の企画職を辞め、保育の道へ。東京都認証保育園の運営、幼稚園の園長を歴任。

法人としての成長の裏に視野を広げた独自の採用指針

2014年の設立からわずか数年でパイオニアキッズの名で6園規模まで拡大し、保育園のみならず、学童やプレイセンターまで展開する社会福祉法人調布白雲福祉会。保育士不足が叫ばれる中で、成長を遂げるその骨子になっているのは、理事長の宮武氏流の採用だ。開園などによって採用規模は毎年変わるが、新規開園を控えた2020年はコロナ禍にあったにも関わらず8月前半で採用目標の24名の内定者獲得を達成した。宮武氏の採用は他法人と比べ何が違うのか。宮武氏が採用で重視していることの一つは個性。「子どもの個性を大事にするということは大人も個性的であったほうがいいと考えています。なので、養成校といういわゆる王道で来た人だけではなくて、違う世界も知っている人が関わってくれることを期待しています」と話す。

子どもと一緒に。同法人の保育を支える職員

「私たちが大切にしているのは、大人が先生を演じないことです。大人も知らないことがいっぱいあっていい。一緒に調べよう。というスタンスなんです」と宮武氏はパイオニアキッズの保育について語る。ニュージーランドのテ・ファリキという保育指針を取り入れている同法人では、乳児期のコーナー保育、幼児期のプロジェクト保育[*2]を通じて、子どもたちが自分の興味関心から答えを導き出すような保育を行っている。根底にあるのは、20〜30年後にどんな世界になっても、子どもたちが幸せを感じながら生きていける基盤をつくりたいという思いだ。絵本、泥遊び、水遊び…。同法人では、地元、調布の豊かな環境を活かしながら、日本の子どもたちにあった独自のコーナー保育の環境を整えている。宮武氏は、「保育士一人ひとりが人的環境であり、謂わば人というコーナー。子どもたちが主体的に関わる対象なので個性を持っていてほしい」と話す。そんな同法人の保育を支える職員は個性が光る面々だ。

パイオニアキッズ 菊野台園 園長
佐伯尚志 ● Saeki Hisashi

中学校の理科の教員から保育士に。転職当初は年代の異なる園児との向きあい方に悩むことも多かったと話すが、豊富な理科の知識を活かし、身の回りの自然環境で起こる〝ふしぎ〟を子どもたちと楽しみながら深めている。

パイオニアキッズ 菊野台園 職員
牛久保亮一 ● Ushikubo Ryoichi

定年まで会社勤めをした後、これからの人生を保育士として過ごしたいと保育士試験を受け、69才で保育の道へ。子どもたちからは〝じいじ〟と慕われ、山登りや海へのお出かけ等、趣味や得意を活かして保育を楽しんでいる。

異業種出身の職員が広げる保育の豊かさ

パイオニアキッズ菊野台園で今年から園長を務めるのは佐伯先生だ。元々、中学校の理科の教員として働いていたが、子どもが生まれたのを機に転職。「小学校くらいまでは理科は子どもたちの好きな科目に入ってくるのに、中学校にあがると理科が嫌いな科目に変わってしまうのを感じていました。勉強として、知識を教えるという立場からではなく、遊びの中で子どもたちの科学的な思考を育むことができたらなと思っています」と意欲を見せる。特に、保育園〜学童まで、長い目で子どもと過ごすことができる同法人の環境に魅力を感じ、佐伯先生は、当初は学童の指導員として就職した。その後、キャリアプランを描く上で、保育士資格は持っておいた方がいいと、保育園での勤務と並行して勉強を続け、保育士試験で資格を取得した。同法人の特色であるプロジェクト保育では、理系のバックグランドを活かし、子どもたちの感じた〝ふしぎ〟を深めながら保育を楽しんでいる。

幅広い職員構成がつくる本当の「家庭的な雰囲気」

同法人には他にも異色の経歴を持つ職員が多数在籍する。子どもたちから〝じいじ〟と呼ばれる牛久保先生もその一人だ。現在75才。定年まで会社勤めで都市開発に関わり、これからの人生を保育士として過ごしたいと69才で保育士資格を取得し、同法人で働き始めた。理事長の宮武氏は、「こうした異なる視点や経験を持つ職員が思いを持って、保育の道に入ってきてくれることは、他の職員にも刺激になります。牛久保先生は山登りが好きで、自らプレゼンし、子どもたちを高尾山へ遠足に連れて行ってくれました。自分の得意なこと、好きなことを喜んでシェアしてくれる。そうしたことが各園で日常的に起きており、各園の個性にもつながっています」と語る。若手から年配の職員まで、さらに各職員の個性が輝く同法人は、子どもたち一人ひとりにとって、どこか自分にあった居心地のよい場所が見つかる環境だ。これまでも、そして、これからも、その時の子どもたちの興味と職員の個性が織りなす保育を見つめ、宮武氏のもと、社会福祉法人調布白雲福祉会は前へ進んでいく。

＊1：子ども自らが〝遊びの環境〟を選ぶ、子どもの主体性を尊重した保育
＊2：子どものアイデアから遊びを広げ、深めていけるように寄り添いながら行う保育